

第139回 岡山外科会

日 時：平成11年6月19日(土) 13時00分より

場 所：岡山大学附属図書館鹿田分館3階講堂(医学部内)

会 長：大本 堯 史

(平成11年8月12日受稿)

1. 頭部外傷により急性悪化した慢性硬膜下血腫の2例

岡山済生会総合病院脳神経外科 菱川 朋 人 近間 正典 藪野 信美

頭部外傷により急性悪化した慢性硬膜下血腫の2例を報告した。症例1は、71歳男性。慢性硬膜下血腫の経過観察中、頭部を強打し意識障害をきたした。CTで被膜の中に急性の血腫を認めた。症例2は、73歳女性。頭部を打撲後、

急に意識障害をきたした。CTで鏡面像を呈する慢性硬膜下血腫を認めた。急性悪化の原因は被膜内への急性動脈性出血であり、出血源として外膜に存在する異常血管網や被膜内の小動脈が考えられた。

2. 脊髄動静脈瘻の治療経験

岡山大学脳神経外科 日下 昇 徳永 浩司 中嶋 裕之
松本 健五 大本 堯史

脊髄のAVMは、本来の動静脈奇形であるAVMと、nidusを持たずdirectなA-Vshuntを示す動静脈瘻(AVF)とに分類される。AVMはnidusが髄内に存在するtypeである。他方、AVFのうちshuntが硬膜組織内に存在するtypeはdural AVF、硬膜内脊髄表面に存在するtypeはintradural AVFに分類される。

AVFの治療法には血管内治療による塞栓術と直達手術がある。Case by caseではあるが、可能であれば低侵襲の塞栓術を選択している。しかし、血管内手法が困難であったり塞栓が不完全な症例では直達手術を考慮している。

この2種類のAVFの治療経験について、代表的症例5例を呈示し報告する。

3. 術中内視鏡の使用が有用であったprimary empty sellaに合併した難治性髄液鼻漏の1例

岡山赤十字病院脳神経外科 高尾 聡一郎 重松 秀明 鈴木 健二

症例は58歳女性。Primary empty sellaに伴う髄液鼻漏のため平成10年7月15日、経鼻的に左蝶形骨洞を閉鎖した。平成11年1月26日鼻漏が再発、2月17日内視鏡を利用し、左蝶形骨洞の閉鎖を行った。瘻孔は直視不可能な蝶形骨洞

外側深部にあった。凝固切除後、洞内を腸骨骨片にて閉鎖した。現在経過観察中だが、鼻漏の再発は認めない。経鼻の手術において術中内視鏡の使用は非常に有用であると考えられた。

4. Brown-Sequard 症候群を呈した特発性脊髄ヘルニアの1例

国立岡山病院整形外科 弓手康正 中原進之介 小浦宏
田中雅人 甲斐信生 田中俊輔

稀な特発性脊髄ヘルニアの1例を経験したので報告した。症例は55歳女性で5年間で徐々に症状が増悪した Brown-Sequard 症候群を呈した。CTM では Th 1/2 に脊髄前方の硬膜外嚢腫は見られ、MRI では T 1/2 で脊髄が(くの

字に)前方変位していた。ヘルニア孔縫合術を行い症状の増悪は見られなかった。特徴的な所見より早期に診断し、神経が変性に陥る前に早期に手術を行うべきと我々は考えている。

5. 腰椎手術後、早期離床の実際

岡山赤十字病院整形外科 中西一夫 那須正義 東原信七郎
小野勝之 寺田忠司

脊椎手術に Instrument が導入され、術後早期離床が可能となった。我々は最近 Instrumentation surgery を施行した後、原則として手術翌日よりの Tilt table による起立訓練を開始し早期離床を試みている。今回結果的にどのくらいで離床ができていたかを検討した。41例を対象

とし、外傷などの特別な合併症があり遅れてしまった症例を除けば、約91.9%の患者が2週間以内にトイレまでの自立歩行が可能となっていた。今後、より後療法は短くなっていくと思われる。

6. Fluoroscopy および CT ガイド下による経皮的椎体形成術

岡山市立市民病院整形外科 大森貴夫 高橋欣吾 寺井祐司
太田裕介 白井正明 渡辺唯志
岡山市立せのお病院 小西均

骨粗鬆症患者の椎体圧迫骨折において、進行する椎体圧壊または遷延する疼痛を有する症例に対して、局所麻酔下に骨セメントの注入を7例7椎体に行った。結果は有効が6例、無効が

1例であった。術中術後の合併症は認めなかった。骨粗鬆症患者の難治性の疼痛を伴う椎体圧迫骨折において、本法は低侵襲で症状の改善をはかる1つの方法と考える。

7. 胸鎖関節脱臼骨折に対し観血的治療を行った2例

岡山大学整形外科 中田英二 佐藤徹 土井武
塩田直史 井上一

胸鎖関節脱臼骨折は一般的に保存的治療で良好な成績が得られると言われている。しかし、手術を必要とする他の肩甲帯部の骨折を認めた場合や、整復不良例で患者が保存的治療法に耐えられない場合には観血的治療法を行う必要が

ある。今回我々は以上のような2症例に対しワイヤーを用いて観血的治療を行った。術後、胸鎖関節部の疼痛は消失し、良好な整復位と早期癒合を認めることができた。

8. 分娩麻痺に対する上腕骨回旋骨切り術の経験

岡山大学整形外科 佐野 敬介 土井 武 西田 圭一郎
橋 詰 博行 井上 一

症例は12歳男児，頭位分娩，5,300gで出生後，Erb型分娩麻痺と診断されたが放置した。集団生活において左上肢の不自由さを主訴に来院，初診時左肩関節の約20度の内旋位拘縮があり，特徴的なラッパ手肢位を認めた。手術は左上腕骨の三角筋付着部の遠位で約40度の回旋骨切り

を施行，術後はラッパ手肢位は消失した。

本術式は比較的簡便で，機能作用点を変えることで上肢ADLの改善を図ることが出来るという利点があり，適応を選べば有用な手術法である。

9. 膝窩部仮性動脈瘤の1例

国立岡山病院心臓血管外科 高 畠 大典 越 智 吉 樹 藤 田 康 文
藤 田 邦 雄 谷 崎 眞 行

膝窩動脈瘤は末梢動脈瘤中，最も頻度が高く，決して稀ではないが，その大部分は真性動脈瘤である。今回我々は外傷の既往もなく，明らかな感染源も不明であった膝窩部仮性動脈瘤の症例を経験したので報告する。

患者は47歳，男性。主訴は発熱と左膝窩部の疼痛，腫脹。膝窩動脈瘤の診断で瘤切除術と人工血管による膝窩動脈再建術を行った。術後経過は順調であったが，精査にも関わらず，はっきりした原因は特定できなかった。

10. 小開腹による腹部大動脈瘤手術

心臓病センター榊原病院 松 本 三 明 畑 隆 登 津 島 義 正
濱 中 荘 平 吉 鷹 秀 範 中 村 浩 己
近 澤 元 太 篠 浦 先 南 一 司
大 谷 悟 榊 原 宣

術後QOLの向上を目指して，小開腹による腹部大動脈瘤(AAA)手術を行った。瘤径が5cm以下の7症例のAAAを対象とした。手術は，平均10cm程度の皮膚切開で腸管を露出しないように行い，中枢側操作時には，Jack knife体位

として創を中枢側に牽引移動し，末梢側操作時には，水平位にして，末梢側に牽引移動した。従来の手術と比較して，術後のQOLの向上が認められ有用な手技であると考えられた。

11. 27歳で発症した心筋梗塞後左心室瘤左心室内血栓に対するDor手術の1例

津山中央病院心臓血管外科 杭ノ瀬 昌彦 原野 雅生

27歳で発症した心筋梗塞例に左心室瘤と心室内血栓を認め血栓摘出と瘤縫縮にはDor手術を

行った。左心室の容積は予想以上に低下したが臨床問題は認めていない。

12. 閉鎖孔バイパスの治療経験

川崎医科大学胸部心臓血管外科	藤倉博之	稲田洋	正木久男
	森田一郎	三宅隆	石田敦久
	遠藤浩一	菊川大樹	武本麻美
	村上泰治	藤原巍	

鼠径部を中心とした大腿動脈及び人工血管に関する感染において、局所の治療のみでは治療に難渋することが多く、最終的には破裂を来たして不幸な転帰をとることもしばしば認められる。当科においては、このような症例には積極

的に閉鎖孔バイパス術を施行してきている。今回我々は、今までにグラフトを含む鼠径部感染に対して7例の閉鎖孔バイパスによる治療経験をしたので報告する。

13. 心拍動下冠状動脈バイパス術——Off-Pump CABG——

岡山大学心臓血管外科	大島祐	浅井友浩	伊藤篤志
ツカザキ記念病院	山本修	角南博	甲元拓志
	山本典良	山口裕己	入江博之
	紀幸一	佐野俊二	

4ヵ月で13(男性10, 女性3)例のOff-Pump CABGを経験し、年齢 69.6 ± 7.8 歳、病変枝数 2.5 ± 0.6 であった。当科では心膜を吊り上げ、Stabilizer, Shunt/Occluder, CO₂ blowerを使用している。結果は吻合数 2.8 ± 0.7 、手術時間

314 ± 62 分、手術室抜管9/13例、術後ICU滞在期間 2.5 ± 1.5 日、無輸血10/13例で、手術死亡や術後脳合併症を認めなかった。入院費用は 322.6 ± 23 万円とより経済的であった。

14. 膵酵素阻害剤持続動注療法が奏功した重症急性膵炎の1例

岡山大学第二外科	山本佳樹	平井隆二	太田徹哉
	村上正和	土井原博義	清水信義

今回我々は、動注療法が奏功した重症急性膵炎の1例を経験したので報告する。患者は43歳男性で、特発性であった。発症後1週間で、多臓器不全の状態で紹介も、上記治療も含めた集

中治療により、軽快。社会復帰をはたしている。発症後可及的早期に積極的に試みられるべき方法と思われた。

15. ペインクリニックを受診した開胸術後胸部痛症例の検討

岡山大学麻酔科蘇生科	的野浩士	中塚秀輝	溝渕知司
	横山正尚	平川方久	

術後手術創の創傷治癒が完成しても創部周囲の疼痛が遷延し痛みに苦しむ症例がある。今回入院治療を必要とした開胸術後胸部痛症例を検討した。症例は9例で1例は手術創が小さい胸腔鏡下手術であった。治療は主に硬膜外ブロックと内服薬の投与が行われ、他に胸部交感神経

節ブロック等が行われていた。これらの治療にて7例は軽快退院となった。症状の改善がなかった2例は当科紹介まで約3年と長かったことが一因と考えられた。

16. 特発性血小板減少症を合併した肺癌の1手術例

岡山労災病院外科 西 英 行 間 野 正 之 浅 野 博 昭
平 成 人 高 嶋 成 輝 福 田 和 馬
小松原正吉

症例は79歳，女性。4年前より特発性血小板減少性紫斑病 (ITP) の治療を受けていた。健診発見にて左上葉肺癌の診断となる。術前血小板数4.6万/ μ lのため， γ -グロブリンを400mg/kg/日，5日間投与し血小板数9.6万/ μ lに上昇する。

術中血小板血漿追加するも安全に左上葉切除施行し得た。免疫グロブリン大量療法は短期間に血小板を増加できる，副作用の少ない非常に有効な治療法と考えられた。

17. 肺犬糸状虫症の2例

岡山大学第一外科 児 島 亨 片 岡 和 彦 藤 原 俊 義
片 岡 正 文 渋 谷 裕 一 岡 林 孝 弘
井 上 文 之 田 中 紀 章

肺犬糸状虫症は肺野の孤立性陰影として発見され，肺癌との鑑別が問題となることが多い，人畜共通の寄生虫感染症である。今回我々は本疾患の2例を経験したので報告する。症例は76

歳の女性と62歳の男性。いずれも切除標本の検討により診断が確定した。本疾患の報告例にこれらを集計し検討を加えた。

18. 甲状腺癌術後49年目に切除した転移性肺腫瘍の1例

国立岡山病院呼吸器外科 木村賢太郎 東 良 平 高 島 大 典
河 合 俊 典
同 外科 白 井 由 行 佐 々 木 澄 治
同 臨床検査科 山 鳥 一 郎

症例は75歳女性，7年前より胸部異常陰影を認め，徐々に陰影の増大があり精査となった。既往歴として49年前に左甲状腺癌で核出術を受け，術後に放射線治療を受けていた。TBLBで腺癌と診断され，左上葉切除術，リ

ンパ節郭清を行った。病理診断では，サイログロブリン免疫染色陽性で甲状腺乳頭癌の転移と診断された。残存甲状腺に腫瘍は認めなかった。甲状腺癌の肺転移手術例としては原発巣切除後の期間は文献上最長と思われた。

19. 肺小腫瘍性病変に対する術前 CT ガイド下マーキングを用いた胸腔鏡手術の有用性と成績

岡山大学第二外科 永 広 格 安 藤 陽 夫 市 場 晋 吾
青 江 基 伊 達 洋 至 清 水 信 義

我々は腫瘤形15ミリ以下の肺腫瘍性病変にたいして術前に CT ガイド下に VATS needle を用いてマーキングを行い，これを指標にして胸腔鏡下肺部分切除術を施行している。その有用性と成績について報告した。過去5年間で

55例63病変にたいして行われ，肺癌が疑われたものが42例46病変，転移性肺腫瘍が疑われたものが11例15病変，その他2例であった。マーキングの位置は良好が96.8%，やや良好が3.2%であり，不良例はなかった。10例に軽い気胸を認

めたが、1例を除き特に処置は要さなかった。
肺小腫瘍性病変に対し、本手技は非常に有用で

あると考えられる。

20. 検診で発見された巨大胸腺嚢胞の1例

岡山赤十字病院外科	森山重治	光永修一	藤山敏行
	松本英男	池田英二	内藤稔
	辻尚志	古谷四郎	名和清人
	大塚康吉		

症例は40歳、女性。無症状検診発見。左前縦隔に巨大な腫瘍影があり、画像上前縦隔嚢胞の診断で当科を紹介された。1999年3月16日後側方切開にて第5肋間開胸した。腫瘍は周囲組織に癒着していたが容易に剝離でき、胸腺左下極

に連続していたためこれを一部つけて摘出した。腫瘍の大きさは19.0×15.0×15.0cmで、茶褐色の内容液を入れていた。病理組織では変性のため上皮は欠損していたが、胸腺への連続性から胸腺嚢胞と診断された。

21. 術前化学療法にて完全寛解が得られた胸腺セミノーマの1手術症例

岡山大学第一外科	小南賢吉郎	片岡和彦	藤原俊義
	片岡正文	渋谷祐一	田中紀章
同 泌尿器科	津島知靖	山本康雄	

縦隔原発性胚細胞性腫瘍は縦隔腫瘍の約5%に発生する稀な腫瘍で、そのうちセミノーマは約40%を占めると報告されており、若年男性に好発する。

近年、CDDPを中心とした術前化学療法の有効性を述べた報告が散見される。我々は術前化学療法にて完全寛解が得られた胸腺セミノーマの1例を経験したのでここに報告する。

22. 食道閉鎖症術後、挙上結腸の著明な拡張を来した1例

川崎医科大学消化器外科	池田正治	木元正利	岡保夫
	林次郎	山村真弘	浦上淳
	吉田和弘	山下和城	真嶋敏光
	岩本末治	山本康久	角田司

21歳男性、食道閉鎖症術後の再建結腸に著明な延長、拡張、栄養障害を来して当科に紹介、挙上結腸全摘後、胃管による食道再建術を施行

した。術後、経口摂取は良好で、体重の順調な回復が見られた。

23. 食道癌上縦隔再発による気管狭窄に対する Dumon Stent 留置症例の検討

岡山大学第一外科	高岡宗徳	猶本良夫	山辻知樹
	青木秀樹	里本一剛	井上文之
	磯崎博司	高倉範尚	田中紀章
岡山市立せのお病院	羽井佐実		

症例は77歳男性。主訴は血痰。食道癌術後に局所再発を認め、再発腫瘍の気管浸潤による気道狭窄を来したため、全身麻酔下にて硬性気管支鏡を用いてシリコン製 Dumon スtent を挿入し、留置後呼吸器症状の著明な改善が見られ

た。Dumon スtent は内腔保持力・耐久性に優れ、腫瘍の浸潤性増殖にも対応可能であることから、症状改善に伴う QOL の向上や留置後放射線療法等を行うことで予後の改善も期待できる治療法である。

24. 食道癌治療切除後照射例における再発因子の検討

岡山大学第一外科	小野亮子	青木秀樹	猶本良夫
	山辻知樹	里本一剛	磯崎博司
	高倉範尚	田中紀章	
岡山市立せのお病院	羽井佐実		

食道癌治療切除後放射線照射が付加された45例中、再発を認めた14例を対象として臨床的検討を行った。再発は全例2年以内に起こり、1年以内が8例であった。初発再発は血行性が最も多かった。照射野内の再発は4例に見られた。

再発巣を切除した2例は1年以上生存した。化学療法を施行した症例では再発期間の延長が見られた。再発例でも切除可能なものは予後を延長できると考えられた。

25. 食道癌術後胃管潰瘍の3例——Helicobacter Pylori の検討——

岡山大学第一外科	山辻知樹	猶本良夫	里本一剛
	青木秀樹	磯崎博司	高倉範尚
	田中紀章		
岡山市立せのお病院	羽井佐実		

食道癌切除後の再建臓器としての胃管は従来低酸と思われていて、胃管潰瘍の報告も稀であったが、また最近の食道癌の治療成績向上に伴い、酸分泌能の保たれている症例も多く、良性の胃管潰瘍の報告も散見されるようになった。

た。我々も最近3例の胃管潰瘍を経験し、その発生機構について Helicobacter Pylori (H-P) との関連を含めて検討した。尚、今回の3症例中、H-P 陽性は1例であった。

26. 食道癌術後に生じた胃管小弯部分壊死の1例

国立岡山病院外科	富井邦年	野村修一	藤井隆文
	井野川英利	藤岡正浩	小橋雄一
	臼井由行	田中信一郎	佐々木澄治

胃管の比較的肛門側の小弯側に壊死・穿孔を生じた症例を経験したので報告する。胃管作成

術後3病日目に、前縦隔に留置したドレーンより廃液があり緊急手術となる。開腹したところ、

穿孔部は小弯側 GIA よりも肛門側で2×3 cmにわたり存在した。

穿孔部を切除し、再縫合した。

本例では経過、所見から、阻血性の壊死であると思われた。

小弯部分壊死の予防、対応としては、血行郭清した小弯は長く残さず切除すること、露出した筋層は漿膜筋層縫合を加えるなどして腹膜化することなどが考えられる。

27. 当科における乳管内視鏡症例の検討

岡山大学第二外科	高橋 三 奈	石部 洋 一	太田 徹 哉
	村上 正 和	土井原博義	平井 隆 二
	安藤 陽 夫	清水 信 義	

乳頭異常分泌症例の中には、それだけが唯一の症状で発見される非触知乳癌も含まれ、その診断は困難である。われわれは、乳管内視鏡を9例に施行し、乳管内視鏡のみで確定診断を得た症例も経験した。

乳管内視鏡9例の結果、平均年齢46.8歳、マンモテック施行6例のうち陽性4例（診断率50%）、分泌細胞診9例のうち陽性例2例（50%）、洗浄細胞診施行7例のうち陽性例3例（67%）であった。

28. 腹腔鏡下胆嚢摘出後迷入クリップによる総胆管狭窄をきたした1例

岡山赤十字病院外科	光 永 修 一	池田 英 二	藤山 敏 行
	松本 英 男	内藤 稔	森山 重 治
	辻 尚 志	古谷 四 郎	名和 清 人
	大塚 康 吉		

腹腔鏡下胆嚢摘出術後1年間無症状ののちクリップ総肝管内迷入による総肝管狭窄・結石のため手術を施行した1例を経験した。クリップ迷入は1979年の初例報告以来、報告が散見され

ている。迷入は無症状に進行すると思われ、biloma・胆汁瘻・胆道周囲感染の伴う症例は長期の観察期間が必要と言われた。

29. 腹腔鏡下に同時に切除しえた盲腸癌と左副腎腫瘍の1例

おおもと病院外科	梅岡 達 生	石賀 信 史	高間 雄 大
	村上 茂 樹	庄 達 夫	石原 清 宏
	酒井 邦 彦	山本 泰 久	

偶然に発見される副腎腫瘍 (incidentaloma) は、剖検例では2～9%、腹部CTでは0.6～1.3%の頻度で認められる。今回我々は盲腸癌に左副腎腫瘍を合併し、腹腔鏡下に同時に切除しえた症例を経験したので報告する。

症例は60歳、女性。主訴は下血、貧血。大腸内視鏡施行し、盲腸に進行癌を認めた。また腹部CTにて左副腎に腫瘍を認めた。結腸癌副腎

転移も否定できないため、十分なインフォームドコンセントのもとに腹腔鏡下にて、結腸右半切除と左副腎腫瘍摘出術を施行した。左副腎腫瘍はAdrenocortical adenomaであった。腹腔鏡による同時切除はトロッカー1本を追加することで比較的安全に施行できよい適応と思われた。

30. 虫垂癌の2例

岡山大学第二外科 奥本龍夫 村上正和 太田徹哉
土井原博義 平井隆二 清水信義

今回われわれは虫垂癌の2例を経験した。1例は61歳女性で右下腹部痛を主訴とし、腹部腫瘍にて発見された症例で、回盲部切除術を施行した。病理では虫垂原発の嚢胞腺癌と診断された。2例目は70歳男性で右横隔膜下膿瘍による

発熱と右季肋部痛を主訴とし、開腹術が施行され虫垂炎の穿孔と診断されたがその後の検索により虫垂の高分化腺癌と判明した。以上、今回比較的稀な虫垂癌の2例を経験したので文献的な考察を加えて報告する。

31. 胸骨・肋骨の特発性骨髄炎を合併した早期胃癌の1例

倉敷市立児島市民病院外科 紀計二 中西英博 林繁樹
同 内科 山根弘路
同 放射線科 武田正章

症例は68歳男性で前胸壁疼痛を主訴に当院受診し、骨シンチにて骨転移様の集積を示した。悪性腫瘍の存在を疑い、全身検索にて早期胃癌を発見した。一方骨生検では非特異的炎症反応のみで、悪性細胞は認めなかった。皮膚病変は

認められないが、前胸壁の特発性骨髄炎・過骨症は SAPHO 症候群の特徴に一致した。骨転移が疑われる症例では悪性腫瘍の検索と共に骨病変の正確な診断が重要であり、骨髄穿刺や骨生検が必要と思われた。

32. 脾膿瘍の1例

倉敷中央病院外科 池田博齊 高三秀成

症例；20歳女性。1999年3月下旬、発熱、左上腹部痛出現し、画像所見にて脾膿瘍と診断され、当科入院。入院時 CRP 33.4mg/dl, 白血球 19,500/ml, CT 上脾臓内に直径6.5cmのLDAを認め、4月7日脾摘術施行。膿瘍は脾臓外に穿

破していた。本年イカ菓子によるサルモネラ感染症が相次いでいるが、本症例でも同製品の摂取歴があり、膿汁培養で *Salmonella Oranienburg* が検出された。

33. 胆管十二指腸瘻を合併した総胆管嚢腫の1例

岡山済生会総合病院外科 中川賀清 岡本康久 丸山昌伸
日置勝義 勝野剛太郎 中城徹
池田雅彦 尾崎和秀 仁熊建文
高畑隆臣 赤在義弘 木村秀幸
三村哲重 大原利憲 筒井信正
広瀬周平

今回我々は繰り返す腹痛にて発見された、胆管十二指腸瘻を合併した総胆管嚢腫の1例を経験したので報告する。

症例は31歳女性 腹痛を主訴に受診 MRCP, CT 等にて総胆管嚢腫および十二指

腸第一部と嚢腫の交通を認めた。

総胆管嚢腫、胆管十二指腸瘻の診断にて嚢腫切除、瘻閉鎖、胆管空腸吻合(Roux-Y)を行った。病理組織所見で瘻孔部周囲の粘膜面より高分化型腺癌が検出された。

術後転移再発なく、順調に経過している。

34. 浸潤範囲の術前診断が困難であった胆管浸潤型胆管細胞癌の1例

岡山大学第一外科	西川 敏雄	木村 臣一	高倉 範尚
	志摩 泰生	青木 秀樹	水野 憲治
	小野 亮子	田中 紀章	

70歳、男性。腹痛、背部痛を主訴に来院した。CT, MRI にて肝左葉の萎縮、肝内胆管の拡張を認めるも腫瘤はなかった。ERCP にて左肝管の途絶を認めたが、胆管内視鏡では異常所見なく、肝左葉原発の胆管浸潤型胆管細胞癌で、浸

潤は左肝管根部までと診断していた。肝拡大左葉切除、胆管切除を施行し術中 frozen で胆管断端の癌細胞陰性を確認したが、術後の永久病理検査では肝側および十二指腸側胆管断端ともに癌細胞陽性であった。

35. 門脈内腫瘍塞栓を有する Stage IV 肝癌にリザーバー動注療法が著効し拡大左葉切除術を行った1例

岡山赤十字病院外科	藤山 敏行	内藤 稔	光永 修一
	松本 英男	池田 英二	森山 重治
	辻 尚志	古谷 四郎	名和 清人
	大塚 康吉		

症例：67歳、男性、主訴：腹痛、現症：当院内科受診し超音波・腹部 CT にて HCC と診断。門脈本幹に腫瘍塞栓あり Vp₃, T₄N₀M₀ stage IV. リザーバー挿入し (CDDP 5 mg/日, 5 FU 250mg/日, を5日間連投, 2日間休薬を1クール) 化学療法6クール施行した。投与後腫瘍サ

イズは縮小したため門脈塞栓を含めた拡大左葉切除術を行った。病理にて切除肝と門脈内塞栓に Tumor cell の残存は認められず。入院時, AFP 212.6 ng/ml が術後 5.7 ng/ml と低下し, 術後 4 ヶ月の CT にて残肝への再発は認められていない。

36. PBSCT 併用大量化学療法を施行した後、原発巣・転移巣を切除した小児進行癌の2例

岡山大学第一外科	尾山 貴徳	漆原 直人	八木 孝仁
	金川 泰一郎	高倉 範尚	田中 紀章

症例1は1歳6ヵ月の女児。rhabdomyosarcoma embryonal type. 原発巣は子宮の下部後方で肺転移を認め group 4 であった。2回の PBSCT 併用大量化学療法により腫瘍は縮小した。切除術施行し CR となった。症例2は11カ

月の男児。neuroblastoma unfavorable type. 原発巣は左副腎で左眼窩転移を認め, stage 4 であった。2回の PBSCT 併用大量化学療法により原発巣の縮小と転移巣の消失を認め, 切除術施行し CR となった。

37. 過去 2 年間に経験した胆道閉鎖症の現状

岡山大学第一外科	漆原直人	尾山貴徳	八木孝仁
	松野剛	稲垣優	貞森裕
	金川泰一郎	岩垣博巳	磯崎博司
	高倉範尚	田中紀章	

胆道閉鎖症は、約 1 万人の出生に 1 人の割合で発生する進行性・難治性疾患である。過去 2 年間に 9 例の胆道閉鎖症を経験した。6 例は primary case で当科にて Kasai 手術が施行され 3 例で良好な胆汁排泄がみられたが、他の 3

例では胆汁排泄が不十分で再手術が施行された。再手術を施行した 2 例を含め 5 例に生体肝移植が施行され現在退院し健常児と変わらぬ日常生活を送っている。